

地域住民と看護学生がごちゃまぜで創る コンパニオンコミュニティ —体験型ケアワークショップの定期開催による ケアが循環する地域づくり—

堀 智子 ● 藍野大学 看護学部看護学科 講師



活動場面

地域医療貢献のポイント

本活動では、体験型ケアワークショップの開催により、他者理解を育み、参加者である学生たちと地域住民と協働でケアの循環型コミュニティづくりの基盤を目指す。

1. 背景と目的

急速な高齢化、家族構成の変化、単身世帯の増加、家庭内におけるケア機能の弱体化などにより、医療・介護需要は増大している。人口減少が見込まれるわが国で、現在、推進されている地域包括ケアは、ケアの送り手から受け手への一方的な支援の提供ではなく、互助・共助の視点を重視し、その地域に住まう人々が相互にケアし合う土壌を生み出すことが必須で、それを循環させていく仕組みづくりが重要となる。

活動代表者は教育機関に所属しており、この基盤を用い、学生たちや地域住民と協働で、ごちゃまぜになって活動することを始動させていく。この活動の中から若年者／高齢者間、支援者／地域住民間のケアの相互性を生み出し、ケアするまちづくりのきっかけを創出していきたい。

2. 取り組みの方法

活動代表者は、高齢社会の中で社会的孤立を思索する「コミュニティコーピング」と、介護を疑似体験できる「カイゴクエスト」と、認知症を持つ方の理解を促進する「認知症世界の歩き方」という3つのボードゲームのファシリテーターの資格を有している。これらのボードゲームは学生、支援者、高齢者など、いずれの世代や立場においても興味関心の深いゲーム体験であり、誰もが主体者になれるゲーム設計となっている。これらのゲームを組み合わせ、参加型学習会を定期開催することで、様々な立場の異世代間交流を深めていく。

3. 期待される成果

本活動では、そこに存在する誰もが持つ力で地域に参画し、地域住民と学生が主体となり相互に支え合うケア循環型コミュニティを構築することを目指している。急速な高齢化と人口減少が進むわが国においては、専門職資源のみで医療・介護需要を支えることは困難であり、地域住民一人ひとりがケアの担い手となる社会基盤の形成が求められている。

本活動は、参加型学習やワークショップを通じ、市民と学生の自然な利他行動を促進し、地域における社会関係資本の強化を図るものである。この活動に参加することで参加者全員が主役になり、自身の底力が再発見でき、その発掘した潜在能力を以て、本活動の場、あるいは別の場での力の転用を行い、社会に参画することができる。そしてケアを循環する地域づくりを目指す。